

『完本丸山健二全集』刊行記念インタビュー②

文学界の巨匠が自由自在に己を語り、作品を語る

なぜ、小出版社から本を出すのか？

柏嶋舎代表 山本光伸（以下「代」）
先生を知ったという方は多いですね。

丸山健二（以下「丸」）
多いです。あれは一回改訂してあるけど、まだ不満なんです。腕を上げれば上げるほど不満になっていった。文学の奥深さというのがよくわかったんです。自分のやり方では足りない、限界までやろうと決めた。そうしたら、徐々に腕が上がってきて、ある編集者に、「これ以上、腕を上げないでくれ」と真顔で言われました。本が売れなくなるから。

代 ほう、そうですか。
丸 こういう世界なんだなと思った。「そう思っているなら俺の担当をやめろ。他の売れる作家にくっつけ」と言っただけです。要するに大手の出版社の編集者はサラリーマンですから、出世しなきゃいかんわけです。出世するためには、売れる作家か、社会的かつ文壇的に出世をするやつにくっつくかのどちらかしかない。俺は売れる作家じゃないもんですから。

ある時、別の担当編集者が来て、「このあたりで賞をもらってほらえませんか？」って言うんです。賞をもらって、将来的には有名な文学賞の選考委員を

やっていたら、と煽るわけ。「おまえそれ本気で言ってるのかよ。そんなことに意味があるの？」って訊いたら、「後から出て来た人に追い越されてもいいんですか」って。「そんなの知ったこっちゃねえよ」と言い返しましたよ。俺のこと全然わかってなくてね。

それでも、今まで大手出版社に対する本音を隠して付き合ってきた。つまり、「いつかこいつらと縁を切つてやろう」というのが口にくそ出さないけれどももずっとあったんです。そのうちに求龍堂や左右社という小さい出版社から本を出すようになり、文壇に汚染されていなくて、真ん中から出たかった。眞人堂というIT関係の会社からも『白鯨物語』を出しました。柏嶋舎に対しては、その本のことですと負い目があったね。

代 負い目なんて。あれは仕方ないことです。我々が五年前にメルヴィルの『白鯨』の超訳を依頼した時には、既に『白鯨物語』の執筆に入られていたんですから。でも、まさか同じ時期に同じ企画が動いているとは思いませんでした。

丸 あのとき、せっかくなを掛けていただいたのに断わってしまった。今ごろ全集の企画なんて持ちかけたなら、きつと一発で蹴飛ばされるだろうな

と思っただけです。

代 それは有り得ませんよ。丸 たまたま、可知さん（『白鯨』の超訳を依頼した柏嶋舎編集者）が電話に出た。

代 そう、ここまで来るのは本当に面白い流れでしたね。奇跡的なつながりというか。うちは小世帯で、みんなで昼食に出してしまったりするんですけど、あの日はたまたま、可知が留守番をしていた。

丸 それで、いきなりOK出すでしょう。「おいおい、一編集者がボスの意見も聞かないで、いきなりそんな返事していいの？」って訊いたら、「いいんです」って。その翌日に長野へ来て、数日後には山本さんも来て、話があつという間に決まりました。

代 僕はもうずっと前から、丸山先生の作品だけ読めばいいと思っただけです。周囲にもそう話していませんでした。一冊でいいから、弊社から先生の作品を刊行させていた方がいいと思っただけです。

丸 それに何年か前から言っていたんです。丸山先生は、反権力、反中央みたいなことをおっしゃっているけど、出ている本は全部中央の大手出版社からだ。これはおかしいって。

丸 そうなんです。おかしいんです。社員にもずっと言っていたものだから、丸山先生からお電話いただいたときは、それはもう二つ返事ですよ。

丸 そうですか。ひそかに地方の出版社で思っただけなんです。地方の出版社

ら、丸山先生の作品だけ読めばいいと思っただけです。周囲にもそう話していませんでした。一冊でいいから、弊社から先生の作品を刊行させていた方がいいと思っただけです。



丸山健二先生（左）と柏嶋舎代表山本光伸。白馬のホテルにて。

てたくさんあるんだけど、結局だめなんです。ただ中央の出版社の真似をしていただけで、独自のアイデアとかやる気っていうのはないんです。それで最終的に清水の舞台から飛び降りる気持ちで柏嶋舎に電話をかけたのが、功を奏したというわけです。

代 あれは昨年（二〇一七年）の五月十日でした。それから数ヶ月で第一回配本の『争いの樹の下で』を刊行しました。これはタイムリングがものすごくよかったです。

丸 ええ。大手出版社の昔の担当が俺に言ったことがあるんです。「丸山さん、編集者と作家は運命共同体です」と。「ぶざけんじゃねえ」と。このガキは、てめえらと共同体と思えるわけねえよって思っただけなんですけど、今柏嶋舎と全集をやるようになってから、そのことが本当に生々しく身に迫ってきました。山本さんと運命共同体だなど、真面目に思いましたよ。

代 僕の方も、この仕事をお受けしたときからそう思っていました。先生もそう考えていただけたらなあってありがたいです。

丸 いやもう、出会いからして運命そのものだ、本当に思いました。

代 それに、この全集のロゴ。最初に見たときに、デジャヴが起きたんです。初めて見たのに、前に絶対にこれを見たことあるって。

丸 それは、すごいですね。デジャヴが起きたのは人生で二回あったんです。一回目は女川原発の取材に行ったときです。ちょうど震災の直後に取材に入っていて、全体を見ようと小高い岩の上に登った途端にデジャヴが起きた。被災地を見たことがあったわけでもないのに。夏のカンカン照

りのなかで、この経験、前に絶対にしたことがあるって。それが初めてでした。二回目はこのロゴのデザインを見たときです。

この話、装丁を担当している寄藤文平さんが聞いて喜ぶと思います。彼も先生の大ファンですから。

丸 こんなインチキくさい話をする、誰も信用しないかもしれないけど、確かにあったんです。このデザインを見たときに、あ、これ前にはっきり見た。ということ、運命で決まってるんだなと。

作家はシェードプランツ
丸 五十年間、文壇といういい加減な世界にいて、それを軽蔑し、避けながらやってきたんですけど、知らず知らずのうちにその雰囲気込み込まれてしまっ質というものが、本当に高みの方向に向かっているかどうかということへのモヤモヤが、ずっとありました。

代 そういうことを考える作家って、僕は聞いたことがないです。今回の、今まで書かれた作品を全て新たに書き下ろして全集にするという、これは本当に世界的にも例がないですよ。

丸 ええ。他の作家は誰もやりません。その理由ははっきりして、大概デジャヴが起きたことなんです。つまり、デジャヴしてから全然腕を磨かなかつたということなんです。工夫もなかった。『族長の秋』を書いたガルシア・マルケスはノーベル文学賞をとった後、金がばんばん入ってきて、途端におかしくなってしまっって、やつつけ仕事を始めたんです。すぐにそれがばれて、だめになりました。

丸 ええ。そういう作家がものすごく多い。「名声」と「お金」というのは、作家にとつて本当に命取りなんです。これはもうすごいことです。

植物に例えると、シェードプランツ（日陰の植物）だと思えます。あんまり日が当たっても、肥料を与え過ぎてはいけない。日光は名譽、肥料はお金。これが過ぎるとシェードプランツは一発で枯れます。

代 作家はシェードプランツなんですか？
丸 そうです。これをはっきり自覚していないとダメです。小説、文学とは何か。描いているわけです。建前じゃなく、本音の部分を描いている。それから、ナルシズムでは絶対にならないです。つまり、夢とあこがれの美しさというものだけを追い求めていくと、必ずつまらぬ壁に突き当たってしまいます。

庭で言ったら、おぼちゃんたちがやるガーデニング。ヴィオラとかパンジーだとか、けばけばしい花で彩ったような、自己満足のべらっぺらの庭。あれは本当の庭じゃない。庭は結局、自然な感じで見せるけど、ほつたらかしてはだめなんです。手を入れた上で自然に見せる。

千利休が弟子だった頃、お師匠さんが彼をある庭へ連れて行って、紅葉した楓の大木の前で「これをおまえの美学でやつてみせろ」



丸山先生宅の庭にて

と云ったんです。利休は落ちていた葉を全部片付けると、その木をゆすってぱつと葉を落とし、「これが私の美です」と言っただけです。それで認められた。つまり無作為の作為。

代 なんだか全てに通じますね。生き方そのものに無限の文学の鉾脈を握る丸 そうなんです。通じるんです。庭をやつて一番よかつたのは、本当に小説のためにやったことです。

一番役に立ったのは、時間をかけるということが、どれくらい恐ろしいかということがまず一つ。それから、生き物を扱っていると、だめです。そして、文学だから、文字だからといって自分の好き勝手なイメージで描くと必ず違和感を持たれて、生きたものがそこ

に生まれなかった。わがかりました。剪定をしないと、庭ではないのだ。植えっぱなし、つまり、書きっぱなしでそこに剪定の手が加えられないと、たとえ事実を書いたとしても、作品にはならないんです。

さらに言えば、この木でとまっしてしまっって、向こうに何かあるかわからないような剪定ではだめ。こつちの木から向こうの木が見えるような剪定の仕方をする。と、すごく奥深く見える。小説も同じで、今、この場面を通して書いていながら向こうが見える。だけど、はつきりは見えない。

代 予感させるといことですか？
丸 ええ。いわゆる暗示です。でも、それを裏切つて、その先に行つたら違うものがどーンとあるような雰囲気になければいけないんです。

丸 ええ。いわゆる暗示です。でも、それを裏切つて、その先に行つたら違うものがどーンとあるような雰囲気になければいけないんです。